

令和元年6月12日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03105

研究課題名(和文) 異年齢期カップリングの発達学：子どもの生きづらさを超えるための学際的協働

研究課題名(英文) The developmental coupling in different-age group : interdisciplinary communication over the concept of human development

研究代表者

川田 学 (KAWATA, Manabu)

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：80403765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「発達」概念の拡張の試みとして、「異年齢期カップリング」という観点から、保育、子育て、学校教育、地域の居場所、発達障がい等をもつ子ども・若者のキャンプ活動などの実践で生じている人びとの関わりの特徴(出来事のパターン)を分析した。その結果、異年齢・多世代構成の活動において、参加者の発達の差が互いに補われたり、個人の言動の意味が場全体の出来事として語られたり、支援者と被支援者の関係が循環的になったり、偶発的な事態に対処する問題解決の過程で新たな価値観を創造するなど、特徴的な出来事のパターンが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの発達研究では、発達の単位を基本的に個人ないし個人の機能・能力に求める傾向が強く、標準からの差分で子どもが評価されてきた。社会的な分断や排除、自己責任が強調されやすい時代状況において、そうした発達観は子どもやその養育者、支援者を生きづらくさせる効果を持っている。異年齢期カップリングの観点は、発達の単位を個人ではなく「出来事」にとらえようとするものであり、上に見いだされたような出来事に着目して実践を理解することにより、個人の機能・能力だけではない観点から、場やコミュニティとしての発達(発展)を記述する一方法を提供することができる。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to expand the concept of "development", from the perspective of "different age group coupling" by analyzing characteristics of relationships between individuals, formed within practices such as child care, child rearing, school education, Ibasho (local settlement), camping activities for children and young people with developmental disabilities, etc.

Our findings reveal that a distinctive pattern of events, such as developmental differences in participants are mutually supported. In addition, attachment of meaning to one's language and behavior that occurs in general situations, the cyclical relation between support provider and recipient of support, the development of new values through the problem-solving process of impromptu situations, etc., emerges within the activities involving individuals of different age groups and generations.

研究分野：発達心理学

キーワード：異年齢期カップリング 発達 多世代 多様性 居場所 異年齢保育 異学年協働活動 分析単位

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

人類史の長きにわたり、子どもは異なる年齢期の他者とともに生活する中で自己を形成してきたが、近代学校の進展とともに、同年齢・同年代の他者との関りが時間的にも密度的にも圧倒的に増した。発達心理学を中心とする人間発達研究は、年齢別による教育と社会実践と親和的な発展をみせた。心理的・身体的諸機能の年齢標準を産出・可視化する研究は、教育実践に対して子どもの発達を予測し理解する目安を与えたが、一方で人間形成の全体が、年齢標準からの差分としての個人の諸機能に還元されるという「発達の個体主義」の思想を浸透させたと考えられる。このことは、自己決定と自己責任が称揚される現代の社会思想状況において、子どもやその周囲にいる者を生きづらくさせる認識枠組みとなっている可能性がある。

近年、そうした事態に反応しているかにも見える教育的・社会的諸実践が存在する。たとえば、保育所や学校等における異年齢保育・教育の広がり、職業体験やボランティアを通じた思春期と乳幼児期の出会いの場の設定、地域における多世代交流型の居場所、発達障がい等をもつ子ども・若者の異年齢でのレクリエーション等である。同時多発的に起こってきたこうした動きには、子どもの社会経験として同年代・同年齢に偏らない場を提供することによって社会性の発達を促そうとする面もあるが、一方で異年齢・多世代が関わりあう「生活」のかたちを創出しようとする社会運動の面も持っている。こうした実践やそこで生じる出来事の意味を把握するためには、個人の能力・機能を分析単位としてきた発達研究のアプローチは妥当ではない。そこで、本研究では、異年齢・多世代の実践において生じる「出来事」を分析単位とするアプローチを「異年齢期カップリングの発達学」と呼び、心理学、教育学、社会学等の領域横断的な研究組織によって基礎的・実践的な研究に取り組もうと考えた。

### 2. 研究の目的

(1) 多世代交流を行う子育て支援等の現場、発達障がい等をもつ子ども・若者のサマーキャンプ、マニラ(フィリピン)の貧困地区での異年齢交流等を対象に参与観察を行うことにより、異年齢の関わりあいもたらず、同年代集団内とは異なる子ども・若者のふるまいや出来事を分析する。

(2) 保育および学校教育現場における異年齢・異学年活動を観察することにより、同学年他者との関り場面との比較を通して、子どもや教師のふるまいや出来事を分析するとともに、その教育効果を検討する。

(3) 乳幼児期の発達研究において、とりわけ否定的表出が普遍的に現れると考えられてきた「2歳児」を異年齢期カップリングの観点から再検討する。

(4) 産育、仮親、若者集団研究を年齢及び異年齢期カップリングの視点から再検討するなど、近代化の過程での地域社会と若者集団の変容をそこにおける学校教育の年齢段階規範あるいは発達の個体主義の受容/抵抗との関係から歴史的に考察する。

### 3. 研究の方法

上記の各研究目的に対応し、以下の研究方法で遂行した。

(1) それぞれのフィールドにおいて、参与観察、聞き取り、カンファレンス等を総合した事例収集を行った。

(2) 一国立大学附属小学校における年間を通じた異学年協働活動に参与観察を行うとともに、児童のコミュニケーション・ネットワークを解析することのできるウェアラブル・センサを導入し、同学年での授業と異学年協働活動のそれぞれにおける児童の参加の仕方等を分析した。また、保育所、幼稚園および小学校で異年齢・異学年実践を行っている実践者との実践交流研究会を開催し、実践的・理論的課題を検討した。

(3) 文献資料による理論的検討を行いつつ、保育者や子育て支援者、養育者とのワークショップを開催し、「2歳児」にまつわる発達心理学的言説の検討を行った。

(4) 文献資料による理論的検討を行うとともに、沖縄・宮古島および石垣島における仮親や子守り等の習俗について聞き取り調査を行った。

### 4. 研究成果

本研究の主要な成果は以下の5点である。

(1) 多世代交流型の地域の居場所実践で生成している出来事のパターン(バーバラ・ロゴフにおける「導かれた参加」の規則性)として、以下の4点を抽出することができた。

A)「箱」のない参加の開始:原則参加条件がなく、その日来た人で一日をつくる事を重視する。

B)「ごちゃごちゃ」していること:その場で生じる問題や情報が、個人ではなく場の全体において意味づけられる。

C)中和作用とズレのある参加:フォーマル教育の中では出会いにくい者同士や役割が反転したような関わりが生じ、そこで生じた小さな葛藤をコミュニティの全体で穏やかな状態にしているようにする。

D)受容の分配と「受け手」の価値づけ:その場で生じる“支援”を二者間での「受容する-受容される」関係ではなく、参加者の気持ちや行為が場の全体に分配されて受容される。また、何かの行為を行った人(与え手)のみならず、それを受けた人(受け手;与え手の行為を生み出した主体)の存在に価値を置く。

(2) 異年齢保育の分析を通して、子どもの集団性というよりも、むしろ子ども各個人が尊重され持ち味が生かされるために異年齢保育の形態を取り入れている実践においては、以下の4つの出来事のパターン(バーバラ・ロゴフにおける「導かれた参加」の規則性)が共通して見られることが仮説的に示された。

A)「時間」の流れ方が変わる:年齢別よりも全体に活動のスピードがゆったりとし、参加者の主観的な時間の流れがゆるやかになる。

B)多様さを補いあう:異年齢では、やれる人がやれることをする。そのため、活動は全体的に穏やかになる傾向がある。

C)継承や再生産が模倣を介して展開する:異年齢では年齢別のような高いパフォーマンス(生産性)よりも、人間関係のタテ・ヨコ・ナナメに言葉や行動や態度などが伝播しやすい。再生産性・継承性をもつ活動がよく観察される。

D)子どもと大人の関係が「民主的」になる:上記3つの特徴を備えた実践を志向すると、結果として保育者から子どもへの指示が最小限になっていく。子どもを信頼して任せる部分が多くなる限り、A~Cに関わる出来事は生まれにくいためであると推測される。

(3) 小学校における異学年協働活動の観察および実践分析を通して、一過的ではない年間を通した創造活動(プロジェクト型)として異学年協働活動を行うことの意義が明らかになった。学校の正規の活動であるが一過的な交流の場合、しばしば学年が上の子どもには下の子への「いたわり」を、学年が下の子には上の子への「あこがれ」を、といったあらかじめ定型化された行動規範が求められる。しかし、年間を通したプロジェクトが異学年で展開される場合、そうした一方向的かつ一過的な行動ではなく、様々なイレギュラー事態が生じ、そこに異学年特有の葛藤や発見が生成される。それに対する協働の問題解決が積み重なることにより、子どもたちのあいだには、通常の学年別教科学習では得にくい自らによる「価値創造」という出来事が生成する。

(4) 異年齢構成による神経発達症の子ども・青年の登山キャンプ活動の観察を通して、青年、子ども、支援者、保護者という構成において、神経発達症をもつ青年と子どもとのあいだには、タテでもヨコでもない「ナナメの関係」が生成しやすいことが示された。支援-被支援の関係になりやすいタテの関係、同質的で同じように活動を楽しむヨコの関係に対して、ナナメはその両方の性格を備えていることにより、参加する者それぞれの気づきや学習の主体性が保たれやすい。これは近年のピア・サポートで重視されているBBS(Big Brothers & Sisters)の効果とも近似する。また、神経発達症の子どもや青年にとって、差異が欠陥として可視化されやすい同年齢集団に対して、異年齢集団は差異が個性として肯定的に受容される傾向があり、そのためそうした活動が「居場所」としての性格を帯びることが示唆された。

(5) 2歳前後の子どもを「反抗期」やterrible twoというように、拒否的・反抗的態度を特徴として発達像を描く言説が発達心理学において構築されてきたが、日本の児童心理学テキストにおいては欧米の子ども研究が広く受容されてきた明治末期から昭和戦前期にかけて、徐々にその年齢期を「強情」「反抗」「手を焼く」を存在と記述するようになっていった可能性が示された。文化人類学的研究からは、2歳児の否定的形容は欧米を中心とする学校教育システムが家庭や社会に浸透したコミュニティに特徴的であることも指摘されている。明治末期から昭和戦前期は、都市部に新中間層が生成され「家庭教育」概念が出現した時代であり、<親(母親)-子>という特殊な異年齢期カップリングが強化されていった時代である。未だ仮説段階であるが、こうした新しい家族形態に対応した子どもの姿を「発達心理学的に」理解する過程において、第一反抗期概念が受容されていった可能性がある。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 28 件)

1. 川田学、「異年齢」において何を見るか:発達論への展望、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、55-64【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.55>】
2. 伊藤崇、日本の異学年教育と香川大学教育学部附属高松小学校の「縦割り創造活動」、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、49-54【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.49>】
3. 日高茂暢・眞鍋優志・小泉雅彦・室橋春光、神経発達症の異年齢期交流に見られる関係性の研究:旭川LD親の会ぷりずむの登山キャンプの参与観察から、子ども発達臨床研究、査読無、第13号、2019、35-48【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.13.35>】
4. 吉田行男・家村維人、みんなきょうだい大きな家族:赤ちゃんからの異年齢保育と多世代交流、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、3-12【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.3>】
5. 東重満・中川絵理、多様性の中で育ち合う異年齢クラス保育、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、13-21【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.13>】
6. 橘慎二郎・前場裕平、分かち合い、ともに活動や価値を創造する異年齢集団の歩み:壁やイレギュラーとの対峙の中で、自己の生き方・在り方を見つめ直す、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、23-34【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.23>】
7. 篠原岳司、教育行政学からみる異年齢・異学年教育の新制度論的考察、子ども発達臨床研究、査読無、第12号、2019、65-74【DOI: <http://doi.org/10.14943/rcccd.12.65>】

8. 川田学、異年齢期カップリングの発達学：＜イヤイヤ期＞を生み出す関係的力学の考察 小児の精神と神経、査読無（招待論文）第 58 巻、2018、97-107
9. 宮崎隆志、協働に基づくケア・コミュニティの意義、臨床教育学研究、査読有、第 6 巻、2018、20-34
10. Miyazaki, T.、Developing critical education thought in community development: the Freirean approach in Japan, *Asia Pacific Education Review*, 査読有、18、2018、227-234
11. 加藤弘通・水野君平、札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査：学校・家庭・自己および居場所に注目して、子ども発達臨床研究、査読無、第 11 号、2018、1-10【DOI:10.14943/rcccd.11.1】
12. 田岡昌大、城戸幡太郎の「臨床教育学」：教育心理学の不毛性問題と関わらせて、心理科学、査読有、第 39 巻、2018、14-30【DOI:10.20789/jraps.39.1\_14】
13. 川田学、その日をつくることと、続いていく／続けていくこと：むくどりホームにおける「導かれた参加」の分析、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、89-107【DOI: http://doi.org/10.14943/rcccd.10.89】
14. 榊ひとみ、戦後日本の子育て・子育て支援の社会史：高度経済成長期を中心に、子ども発達臨床研究、第 10 号、2017、109-125【DOI: http://doi.org/10.14943/rcccd.10.109】
15. 伊藤崇、センシングツールで授業が見えた、香川大学教育学部附属高松小学校（編著）創る：2 領域カリキュラムで子どもが変わる！教師が変わる！ 東洋館出版社、査読無、2017、pp.106-107
16. 渡辺隼人・蒔苗詩歌・室橋春光、発達障害を持つメンバーとの長期にわたる関わり：心理的居場所としての「ごぶサタ倶楽部」、子ども発達臨床研究、査読無、第 9 号、2017、41-46【DOI: http://doi.org/10.14943/rcccd.9.41】
17. 田岡昌大・及川智博、城戸幡太郎の保育者論の現代的意義：教養と技術の關係に着目して、教育学の研究と実践、査読有、第 12 巻、2017、1 - 11
18. 柴川明子、むくどりホーム・ふれあいの会の生い立ちといま、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、3-17【DOI:http://doi.org/10.14943/rcccd.10.3】
19. 柴川明子・小林真弓・宮崎隆志・川田学、座談会・『未完のムクドリ』を探して：多世代多様な場をめぐる対話の記録、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、19-48【DOI: http://doi.org/10.14943/rcccd.10.19】
20. 浜口由佳、『むくどりホーム』スタッフのお仕事：ある日の光景より、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、53-68
21. 藤井奈津子、『むくどりホーム』という感受体、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、69-78
22. 石上千草、エピソードから見るむくどりホームの横顔、子ども発達臨床研究、査読無、第 10 号、2017、79-86
23. 川田学、心理学的子ども理解と実践的子ども理解：実践者を不自由にする「まなざし」をどう中和するか、障害者問題研究、査読無、43 巻、2015、178-185
24. 川田学、発達心理学的自由論 12：年齢と発達、現代と保育、査読無、第 92 巻、2015、74-89
25. Miyazaki, T.、Community Development as Community Empowerment、社会教育研究、査読無、33 巻、2015、1-13【DOI: http://hdl.handle.net/2115/59231】

〔学会発表〕(計 15 件)

1. 田岡昌大、城戸幡太郎の「心理主義」批判と「ヒューマニズム」について、日本教育学会第 77 回大会、2018、宮城教育大学
2. 川田学、異年齢期カップリングの発達学：＜イヤイヤ期＞を生み出す関係的力学の考察、第 118 回日本小児精神神経学会、2017、北海道大学
3. 小泉雅彦・眞鍋優志・室橋春光、特別支援学級在籍生徒の交流教育における人間関係の構築に関する検討、日本 LD 学会第 26 回大会、2017、宇都宮大学・早稲田大学・栃木県総合文化センター
4. 伊藤崇、小学 1 年生から 6 年生までが参加する創造的協同活動における対面行動の分析：人間行動センシングツールを用いた調査から、日本認知科学会冬のシンポジウム、2016、明治大学
5. Ito, T.、Exploration for communication in multigrade classes with the wearable sensory device and the system for big-data analysis, HU-SNU-NTNU-KU Joint Symposium for Science Education, 2016, Seoul National University
6. 榊ひとみ、戦後日本の 0・1・2 歳児の保育子育て施策の展開と課題、日本社会教育学会第 39 回北海道・東北地区 6 月集会、2015、恵庭市市民会館
7. 宮崎隆志、創造的学習の成立条件：「非決定空間」に着目して、日本社会教育学会第 62 回研究大会、2015、首都大学東京
8. 宮崎隆志、地域に基盤を置く子ども・若者支援論の可能性：学童保育実践を事例に、日本社会教育学会 6 月集会、2015、立教大学

〔図書〕(計 1 件)

1. 大宮勇雄・川田学・近藤幹生・島本一男編、どう変わる？何が課題？現場の視点で新要領・指針を考えあう、ひとなる書房、2017、全 142 頁

〔その他〕

本研究に関連する情報は以下のウェブサイトにも掲載されている。

- ・北海道大学子ども発達臨床研究センター <https://www.edu.hokudai.ac.jp/rcccd/>
- ・北海道大学大学院教育学研究院乳幼児発達論研究室 <https://hokudai-cdee.jimdo.com/>

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：室橋 春光

ローマ字氏名：MUROHASHI, Harumitsu

所属研究機関名：札幌学院大学

部局名：心理学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 00182147

研究分担者氏名：宮崎 隆志

ローマ字氏名：MIYAZAKI, Takashi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：教授

研究者番号(8桁): 10190761

研究分担者氏名：伊藤 崇

ローマ字氏名：ITO, Takashi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20360878

研究分担者氏名：加藤 弘通

ローマ字氏名：KATO, Hiromichi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20399231

研究分担者氏名：辻 智子

ローマ字氏名：TSUJI, Tomoko

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20609375

研究分担者氏名：白水 浩信

ローマ字氏名：SHIROZU, Hironobu

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁): 90322198

研究分担者氏名：石岡 丈昇

ローマ字氏名：ISHIOKA, Tomonori

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10515472

研究分担者氏名：岡田 智

ローマ字氏名：OKADA, Satoshi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：10458862

研究分担者氏名：日高 茂暢  
ローマ字氏名：HIDAKA, Motonobu  
所属研究機関名：作新学院大学  
部局名：人間文化学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：20733942

研究分担者氏名：榊 ひとみ  
ローマ字氏名：SAKAKI, Hitomi  
所属研究機関名：函館短期大学  
部局名：保育学科  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：30757498

研究分担者氏名：田岡 昌大  
ローマ字氏名：TAOKA, Masahiro  
所属研究機関名：大阪青山大学  
部局名：健康科学部  
職名：講師  
研究者番号(8桁)：90804758

## (2)研究協力者

研究協力者氏名：吉田 行男  
ローマ字氏名：YOSHIDA, Yukuo

研究協力者氏名：家村 維人  
ローマ字氏名：IEMURA, Tadato

研究協力者氏名：東 重満  
ローマ字氏名：AZUMA, Shigemitsu

研究協力者氏名：中川 絵理  
ローマ字氏名：NAKAGAWA, Eri

研究協力者氏名：橋 慎二郎  
ローマ字氏名：TACHIBANA, Shinjiro

研究協力者氏名：前場 裕平  
ローマ字氏名：MAEBA, Yuhei

研究協力者氏名：篠原 岳司  
ローマ字氏名：SHINOHARA, Takeshi

研究協力者氏名：柴川 明子  
ローマ字氏名：SHIBAKAWA, Akiko

研究協力者氏名：小林 真弓  
ローマ字氏名：KOBAYASHI, Mayumi

研究協力者氏名：浜口 由佳  
ローマ字氏名：HAMAGUCHI, Yuka

研究協力者氏名：藤井 奈津子  
ローマ字氏名：Natsuko Fujii

研究協力者氏名：石上 千草  
ローマ字氏名：ISHIGAMI, Chigusa

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。